

— 上智大学 —

2月6日 文(英文・ドイツ文・フランス文)・総合グローバル学部 国語

解答

一

問一 d 問二 (1) c (2) b 問三 d 問四 b 問五 a
問六 a 問七 c 問八 d 問九 b 問十 c

二

問一 c 問二 b 問三 (ア) b (イ) b (ウ) a (エ) a 問四 d 問五 b
問六 c 問七 d 問八 b 問九 c

三

問一 a 問二 (2) b (3) a (4) b 問三 c 問四 d 問五 a
問六 a 問七 b 問八 d

その他の大学・学部の解答解説はコチラ！

[増田塾 2019 解答速報ホームページ](#)



早慶上智・GMARCH・関関同立などをはじめとした難関大学の解答解説を随時公開していきます！

解 説



※説明の際は本文全体を通しての行数で「〇行目」というように説明箇所を示していく。この大問□本文は全 68 行となっている。

問一 本文 1、2 行目に「～日本人は、抽象的な思弁哲学～よりも～具体的な文学作品のなかで～思想を表現してきた」とある。ということは、傍線部 1「鎌倉仏教は～日本史の例外である」のだから、「鎌倉仏教」＝「抽象的な思弁哲学」である、ということである。よって正解は d である。a は「具体的な文学作品のなかでその思想を表現してきた」が 1、2 行目と真逆で×。b の「独創的な哲学の体系をつくり出した」は、前文との対応で見れば正しく見えるが、6、7 行目から考えると言い過ぎである。鎌倉仏教と儒学の一部は、西洋や中国のような傾向を持つ点で日本の中では例外的だが、それでも「抽象的であり包括的な思惟を生み出した」(＝西洋や中国のような包括性と抽象性になる)わけではない。よって×である。c の「抽象的・理性的であること」は 7 行目にあるが、ここは「言葉の秩序」の説明なので「鎌倉仏教」そのものの説明には当てはまらず、×。

問二 (1)傍線部 2 の「このような性質」は直前 17、18 行目「日本文化の全体が～きらった」に書かれている。17 行目「形而上」は「抽象」側の現代文用語である。よって「形而下」は「具体」側である(これは入試現代文では基本知識である)。ということは「このような性質」とは「日本文化は具体的現実と密接に係わり抽象的世界を嫌った」ということである。よって正解は c である。a は「形而下=具体」→「形而上=抽象」へ向かったことになり真逆なので×。b は 14、15 行目にあるが否定されている内容なので×。d は 15 行目にあるが、「抽象」「具体」の関係から大切なのは「工芸的な日用品」(この言葉が「具体」側を示す)である。しかし d ではその言葉を抜いて単に「美的に洗練」としてしまっているので×。

(2)選択肢は 4 つとも傍線部直後 19～22 行目に書かれている内容だが、a、c、d は具体例に過ぎず、部分的、個別的である。その 3 つをすべて含んでまとめることのできる b が正解。

問三 「僕」とは「しもべ、召使い、身分の低い者」のこと。「僕とする」は「しもべとする、召使いとする」ということなので正解は d である。「僕」の知識がないと解けない問題だが、上智大学を受ける生徒ならば知っておくべきレベルの言葉である。

問四 傍線部 4 は 22 行目「同時代の日本では～」から説明されている。選択肢の主語はすべて「日本の文学」なので 23、24 行目を見ればよい。「日本の文学は～西洋の哲学の役割を荷」ったのであるから、正解は b である。a「思想や他の芸術と交渉をもたなかった」が 22、23 行目と矛盾するので×、c と d は要素の一つに過ぎない「仏教」のみに焦点を当てた内容になっているので、部分的であり不十分なので×。本文では「仏教」は(問一でも触れたように)「哲学、思想」の例として書かれているに過ぎない。

- 問五 傍線部 5「表面上の類似」を探すのだから中国と日本の共通点を読み取ればよい。まず中国の説明を傍線部直前 27、28 行目で、日本の説明を 22、23 行目で確認し共通点を探す。27、28 行目では「中国では、文学と美術～不可分であった。音楽もまた文学から独立～ではない」、22、23 行目では「日本では～美術が～文学とむすびつき～、音楽も～言葉(=文学)と連なっていた」とある。つまり日中はともに「文学が美術、音楽とつながっていた」ということ。よって正解は a である。b「別個の発展」、c「代弁」は本文には書かれていない内容で×。d「書を介して」としてしまうと 27 行目にあるように、中国にしか当てはまらない内容になってしまい、共通点にならないので×。
- 問六 傍線部 6 は「比喩(36 行目)」なので、そのもとになる部分である 34 行目に注目する。すると、中国では「哲学=普遍的な原理、全体」、「文学=具体的な場合、部分」であるとわかる。つまり傍線部は「普遍的な哲学が部分的な文学を包み込む」と言っているのである。よって正解は a である。b は 34 行目と真逆の内容なので×。c「形而上学的世界観」という表記だけでは「全体」のみしか示したことになるが不十分、かつ「吸収された」は言い過ぎで×。d は、「還元される」が×。傍線部 6 の 3 行前に「還元」があるが、その意味でも、辞書上の意味でも、「還元される」では、「包み込む、包括する」という意味にならない。
- 問七 傍線部 7「著しい特徴」は傍線部直後の 42～52 行目に例を交えて説明されている。その中でも端的に傍線部を表している部分は 43、44 行目「新旧が交替するのではなく、新が旧に付け加えられる」、49 行目「新旧の交替よりも旧に新を加える」の 2 か所である。よって正解は c である。a は 39 行目に書かれてはいるが、傍線部 7 前半「しかも～長かったばかりではない」ですでにこの前までに述べられてしまった「長かった」ことについての内容になっているので×。b は 39 行目にあるが、ここは中国の説明なので×。d は 44 行目から書かれているが、文学の一つの例に過ぎないので部分的であり不十分なので×。
- 問八 本居宣長は「源氏物語 玉の小櫛」において、「もののあはれ」を「源氏物語」の本質と見定めた。正解は d である。
- 問九 傍線部 9「中国の場合」の説明は 63 行目下「中国の場合のように」～65 行目までに書かれている。その中の 64、65 行目「旧体系と新体系とは～対立して～一方が敗れなければならない」と同内容となる b が正解。a は 63 行目に書かれているがここは「日本」の説明なので×。c は 64 行目「脅かされる」に反するので×。d も 62、63 行目に書かれているが「日本」の説明なので×。
- 問十 「何と何が」、傍線部 10「同じ」かを確認する。日本文化の説明は 65 行目「しかし旧に新を加えるときには～」以降に書かれている。その「旧に新を加える」と「同じ」なのが 66、67 行目「著しい極端な保守性(=旧)と極端な新しいもの好き(=新)とは～楯の両面である」ということ、である。つまり「古いものを残して存続させ、新しいものも加えていく」点で「同じ」ということである。よって正解は c である。a の書き方では「旧と新」の意味が出ないので×。b「対決させる」のは 64、65 行目より「中国」の話なので×。d「新しいもの好きの一過性を抑制」してしまっは「新

を加える」ことにならないので×。

二

問一 「よろしき時」は「普通の時」。これまでであれば雲居雁は祖母大宮のところに行ったので(夕霧は雲居雁に)逢おうと思えば逢うあてもあったが、これからはそうもいかないので心細い...というのである。

問二 「かたみに」は「互(かた)みに」であり、おたがいに...ということ。

問三 ア=夕霧のセリフの中で尊敬語がつかわれており「恋しく」とあることから恋人の雲居雁を指すとわかる。イ・ウ・エは全て地の文の尊敬語であり、主語がそのまま敬意の対象となる。

イ=夕霧のセリフをうけて「まろも、さこそはあらめ(私も同じ気持ちよ)」と答えたのは雲居雁。

ウ=さらにイのセリフをうけて「恋しとは思しなんや(僕を恋しいと思ってくださいませか)」と訊きかえしたのは夕霧。

エ=「ひたぶる心に、ゆるしきこえたまはず」とは「一途な心でお離し申しあげなさらぬ」ということ。夕霧が雲居雁を...というふうに「男性」を主語にして考えるのが自然な文脈であろう(現代だったら、逆のカップルもいるだろう)。

問四 傍線部を含む一文を訳せば「どうして、これまで逢おうと思えば逢える機会が少しはあったはずの日々を、離れたまま過ごしてきてしまったのだろう(もっと逢っておけばよかった)」となる。この「隙」を「時間」と考えても成立しそうではあるが、時間を持て余していた...と捉えるよりは、逢えるチャンスはいくらでもあった...と解釈する方が、夕霧の言わんとするニュアンスに、より近いと言える。

問五 「騒がれば」の「れ」は、助動詞「る」未然形である。未然形の下に「ば」が接続すると仮定になり、ここまでで**b**か**d**の二択に絞れる。続く文脈は問三エの解説を参照。夕霧は「もう、どうなってもかまうもんか」と思ったのである。

問六 「知らせたまはぬ」は二重尊敬であり、この「せ」を使役と考える必要はなく、**a**と**b**が消去できる。また「知らせたまはぬ」の「ぬ」は打消(ず連体形)、「あらざりけり」の「ざり」も打消(ず連用形)であって、この一文は二重否定になっている。大宮の知らないことではなかった...のである(つまり、大宮は「知っていた」)。

問七 雲居雁の乳母は、二人が逢っている様子を目撃してから否定的な発言を重ねている(=「あな心づきなや」「いでや、うかりける世かな」etc.)。雲居雁の結婚相手が、いくら光源氏の血筋で立派であるからと言っても(=「めでたくとも」)今の身分が高いとは言えない六位(の夕霧)であっては困る...というのである。

問八 「くれなゐ(紅)」は夕霧が雲居雁を思って流す血の涙の色である(もちろん、オーバーなたとえ)。「あさみどり」は六位が着る袍(ほう)の色である(実際は「浅葱(あさぎ)色」といって緑がかかった薄い藍色である)。夕霧にとっては、六位という身分も、また自分が着ている衣服も、屈辱的なものであり、これをわざわざ歌の中で肯定する必然性はない。

問九 衣類・染色にまつわる縁語だったとしても、「うき」をグループに入れるのには無理がある。

目

問一 「為 A 所 B」は「A の為(ため)に B せらる所となる」とよみ受身となる。「見」は受身としても使われる。

問二 2=「宜」は、「宜しく...すべし」とよむ再読文字で「...するのがよい」。「脩」には「すすめる」の意味もある。商氏は幼い二人が早く結ばれることを望んでいるのである。

3=「続」には「つなげる」という意味もあり、ここではその使い方になっている。商生と楊采采が結婚してつながるものはお互いの両親の縁である。

4=「帰」には「嫁(とつぐ)」意味もある。

問三 傍線部の一つ前の文で、「女(=楊采采)が(ということは商生も、であるが)年齢を重ねた」こと、また傍線部の直後の文で「季節ごとの祭日の際に兄妹の礼をもって会うだけになってしまった」ことが書かれており、あわせて考えれば正解が決まる。

問四 楊采采が商生に求めているのは、自分が商生を恋しく思う気持ちを込めた詩に対する商生側からの返事...である。a「自分の詩の内容を引き継ぐような」b「自分の詩に足りない内容を補うような」では、このニュアンスがない。cは形式のことだけを言っている。

問五 「A 不如 B」で「A は B に如(し)かず」となり「A は B に及ばない」ということ。人間と桂の木を比べて、桂の木の方が勝っている...というのである。

問六 「腸断」は「腸(はらわた)を断(た)つ」。悲しみにひどく心が痛むこと。また本文が、幼い二人の恋の話...とわかれば、それも判断材料となる。

問七 「袍」は衣服であり「余香(=残り香)」がその中にある...というのだから、この点で a と d は合わない。また「余香」を「貴女の香」とするのも、たいへんロマンティックではあるが、「余香」は「花の香」でよいだろう(二人は桂の花の香漂う月光の下語り合っただけの幼い恋...なので)。cには「(桂)花の香」に相当する部分もない。

問八 七言絶句では、通常、第一句・第二句・第四句末が押韻する。韻は現在の漢字の音読みから類推して考えればよいが「芳(ロウ)」「袍(ホウ)」と似ているのは「高(コウ)」しかないであろう。なお以下は参考。楊采采の作った詩もよくみると「芳(ホウ)」「房(ボウ)」と同じ韻になっている。つまり商生は、わざとこの韻にした...とも考えられるわけである。

その他の大学・学部の解答解説はコチラ！

増田塾 2019 解答速報ホームページ



早慶上智・GMARCH・関関同立などをはじめとした難関大学の解答解説を随時公開していきます！